ミュージック・マガジン2006年12月号

フィルム

7時間を超えるドキュメンタリーの言葉の重み

『AA～音楽批評家・間章』（青山真治　全6章・7時間23分　12月12日からアテネフランセ文化センターで公開）

高柳昌行や阿部薫との親密な交流で知られ、1978年に32歳の若さで逝去した音楽評論家・間章（あいだ・あきら）について関係者が語ったドキュメンタリー。7時間半にもわたる計12名へのインタビューから、彼の破天荒な人柄や文筆家としての特異な才能が浮かび上がってくる。

ミルフォード・グレイヴスやスティーヴ・レイシーの来日公演を企画するなど、オーガナイザー的な立場で日本の即興音楽シーンに関わってきた間。だが、その独善的な性格ゆえ、ミュージシャンや同業者との喧嘩は絶えず、過激で挑発的な言動は周囲を騒然とさせた。そうした事実についてはこれまでも多くが語られてきたし、この映画でも具体的な逸話とともに触れられている。ただ本作は、そうした間の存在をいたずらに伝説化するものでは、決してない。

というのも、関係者の証言が、間について語ったコメントのみで構成されているわけではないからだ。端緒はあくまでも間に関する逸話だったとしても、いつの間にか会話は脱線し、関係者の個人的なジャズ観や批評観へと帰結する。例えば、大友良英はかつて師事した高柳昌行を崇拝していた際のエピソードを赤裸々に語り、近藤等則はデレク・ベイリーを引き合いに出しながら自らの即興論をぶつ。佐々木敦や湯浅学は音楽批評の文体について鋭い考察を巡らせ、平井玄は音楽と政治の関係を明晰な思考で論じる。…といった具合に、まあ、とにかく出てくる話のすべてが間に関係している／いないに関わらず、目から鱗が落ちるものばかり。無論、清水俊彦や副島輝人ら、間と同時代を生きた評論家による回想の数々も、70年代特有の熱気を孕み刺激的。副島の『日本フリージャズ史』を別の角度から切り取ったような部分も散見される。

言い方を換えれば、これは間章という人物を媒介にした、12名の音楽観の集積でもある。そして、その言葉の重みにはただただ圧倒されるばかりなのだった。

土佐有明